

5 生 活 科

佐和真由美・須本良夫

1 生活科でめざす自立とは

生活科の教科目標は、次のとおりである。

具体的な活動や体験を通して、自分と身近な社会や自然とのかかわりに関心をもち、自分自身や自分の生活について考えさせるとともに、その過程において生活上必要な習慣や技能を身につけさせ、自立への基礎を養う。

この目標を受けて、子どもたちの「自立」を考えると、次の3つの側面からとらえることができよう。

(1) 生活上の自立 (2) 精神上的の自立 (3) 学習上の自立

具体的には

- ① 学級や学校という集団や社会の一員として集団生活ができる。
- ② 自分のことは自分ですることができる。
- ③ 日常生活に必要な習慣や技能を身につけることができる。
- ④ 学習活動や集団生活において自分の考えや意見をはっきりと述べたり、自分の意志を人に伝えたりすることができる。
- ⑤ 人の話をきちんと聞き、自分の考えを深めることができる。
ということに置き換えて考えることができる。

2 本校生活科でめざす子どもの姿

自立という観点から、本校でめざす子ども像をあげてみる。

- (1) 具体的な活動や体験を通して知的な問いや実践的な欲求を見つける子ども
 - (2) 自分で見つけた問題について、自分なりに解決する方法を考えたり、試したりする子ども
 - (3) 自分で気づいたり感じたりしたことを豊かに表現する子ども
 - (4) 自分なりの考えをもち、考えに基づいて、判断したり、決定したりすることのできる子ども
 - (5) 人やものとかかわり合いながら活動することができる子ども
 - (6) 自分や友達のしたこと（していること）をふりかえる子ども
 - (7) 生活科で活動したことを基に、自分の生活を自分で豊かにしよう、工夫しようとする子ども
- これまでの本校の一連の研究（「個が生きる授業の創造1988～1990」「個が生きる授業の評価1991～1993」「感性を育む1994～1996」）の中で上記(1)(2)(3)(5)における成果がみられた。

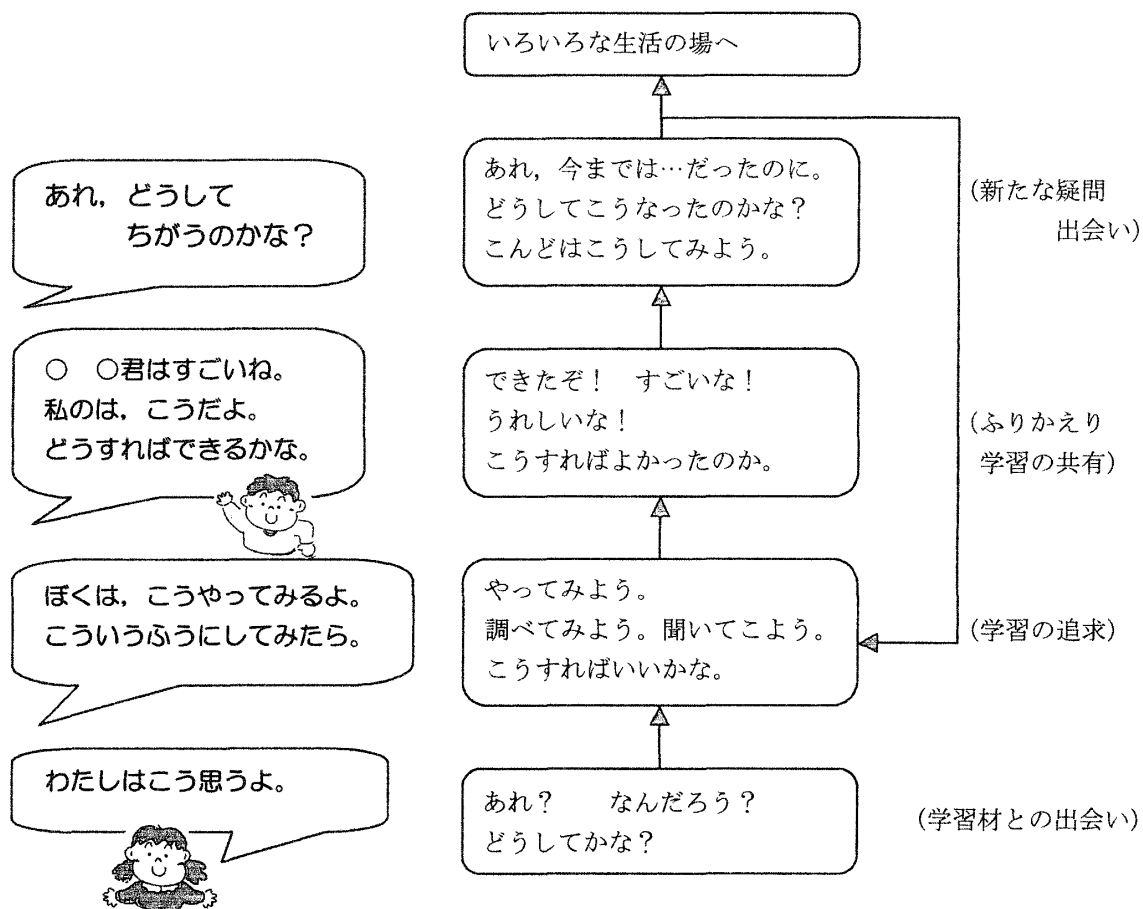
さらに、「自立に向かう子どもたちにむけて」サブテーマー自立につながる自己決定—の実現に向けて、(4)(7)に焦点をあてて研究を進めてきた。今年度は、さらに人やものとかかわり合いながら自分の活動を豊かにしていけるように(5)(6)に焦点を当てて実践研究を進めていきたい。

3 生活科における具体的な活動や体験とは

生活科における具体的な活動や体験は、結果を得るための単なる方法や手段ではない。それは、学習の内容であり、方法であるとともに、目標でもある。単に良い結果だけを求めるのではなく、結果に至る過程を大切にしていきたい。それは、子どもたちが学習材と出会い、試行錯誤を重ねる

過程の中にこそ、子どもたちのさまざまな工夫や気づきが見られるからである。そして、この過程でそれぞれの活動が絡まり合い刺激し合うことで、子どもたちは、自ら考えを発展させたり活動の仕方を選択したりしていけると言えよう。こうした活動や体験を積み重ねていけば、その時々で充実感や有用感を味わうことができ、どのような結果でもそれをバネとして次への活動へ挑戦していこうとするであろう。こうして、子どもたちが、生活科からあらゆる生活の場へ活動を発展させていくことが、子ども自身の生活を豊かにしていくことにつながると考える。

4 具体的な授業の中で



5 総合的な学習との関連

総合的な学習は、「人とのかかわり」「もの（自然）とのかかわり」を通して、自分をみがき高めることをねらっており、生活科の学習を発展させていくものになっている。そこで、その基礎となる低学年では、問題解決的な活動の過程を大切にして、ゆったりと考えたり活動に没頭したりする時間を十分に取りたい。そのためにも、学習を進めていきながら年間指導計画の見直しを図っていききたい。子どもたちが「私はこうしたい」という思いをもち、自分なりに試行錯誤を繰り返していく中で、人やものとかかわり合いながらさまざまな発見をし、活動の楽しさを味わい、次々と活動を発展させていけるように実践をしていきたい。

6 成果と課題

本年度は、前述したように(5)と(6)の2点に焦点を当てて実践に取り組んできた。この2つの観点でふりかえてみたい。

(1) 人やものとかかわり合いながら活動することができる子ども

子どもたちが、自分から何らかの働きかけができるように、繰り返し活動することを大切にしてきた。栽培活動も学校探検も、自分なりにめあてを決めて対象とかかわるうちに、さまざまな不思議や気づき生まれ、そこから新しいめあてをもって活動に取り組むことができていた。

また、子どもたちが活動に没頭し、活動の楽しさを十分に味わえる遊びづくりを通して、人やものとかかわり、自然とかかわりを図り、年間を通して、直接体を触れ合って遊んだり、土だんごや秋と一緒に遊んだりする活動を計画した。

体を触れ合う遊びでは、遊ぶ相手を、学級内から実習生、そして親子へと広げていき、さまざまな人といろいろな遊びを経験するようにしていった。楽しく遊ぶために、自分たちで話し合ってルールを作り、遊び方やルールを分かりやすく他者に伝える必要が出てくる。かかわり合う相手を広げて繰り返し遊ぶうちに、相手に応じて自信をもって自分の遊びを説明できるようになった。

土だんご遊びでは、砂から石のような固まりへと変化していく形状の変化など、遊びの中からさまざまな発見をすることができた。こうした知的な気づきの深まりも、個人作業では限界がある。それは、遊びの中であんな土だんごはどうやったらできるのだろうという友達の土だんごとの比較や、どこの土を使ったら硬い土だんごになるのだろうという対象である自然物の比較などを通して、子どもたちがさまざまなものにかかわっていった成果であろう。

また、子どもたちが遊びの中に秋を取り入れたのは、身の回りの自然と自分なりに何らかのかかわりをもとうとする気持ちの表れと考えられる。

子どもたちが遊びに夢中になり、本気になればなるほど他者とぶつかることは多くなる。しかし、遊びの楽しさを味わった子どもたちは、遊びの輪の中で相手と交渉しながら自分の意見を通していくことを学んでいった。

(2) 自分や友だちのしたこと（していること）をふりかえる子ども

ふりかえりは、課題をつかみ活動していく中で、活動をふりかえるときに、というように、さまざまな場面で行うことができる。自分のしていることや工夫などをみんなに伝える場を設けることで、自分のしていることを改めて意識し、友だちの活動と比べて考えたり絡み合わせて考えたりすることができるようになってきた。そして、お互いのよいところを見つけ合いアドバイスをし合うことで、自分に自信をもち、「今度はもっとうしていこう」という次の活動へのめあてと意欲をもつことができていた。

教師は、時間や場面を子どもにゆだねて、子どもたちが自分の活動をふりかえられるようにしていき、常に子どもの活動から自身の支援をふりかえることが大切である。

他者との遊びでも、土だんご遊びでも、対象と何らかのかかわりがあるからこそ、他者に気づき、自分をふりかえり、自分に気づくことができるのである。かかわりとふりかえりは、密接に結びついたものと言ってもよいであろう。

遊びづくりは、子どもたちが自然に人やものとかかわり合うことができ、ふりかえりを生かして次々に活動を発展させていくのに適した題材だと言える。学校集団だからこそできる遊びを取り入れてきたが、これからは、生活科の時間をこえて、子どもたちのふだんの生活に返り、広がっていくものになるようにしていきたい。また、遊びに限らず子どもたちが没頭できる魅力のある学習材を常に追い求めていきたい。